図書館だより

上田女子短大
附属図書館

昭和50年11月25日
上田女子短期大学
図書委員会 発行

本から心の糧を

溝上泰子

わたしは、昭和十二年三月に、旧東京文理科大学（現教大）の教育学科を卒業しました。文部大臣荒木陸軍大将がきて、訓示をするという軍国時代でした。同期生十二人、その中でわたし一人が女性でした。卒業式前の一夜、新宿のレストランの一室で、篠原助市博士をかこんでお別れのパーティーをもちました。先生はもう故人です。が、日本教育学界では、いまも生きておられ「理論的教育学」は名著の一つです。その夜、先生が「みんな、一生涯本をよめ。本がよめなかった日は、新聞の一面だけでもいい。よむことをおこたるな」といわれました。情報時代の今日、新聞をよむことはたいへんに精力がいりますが。

本には大きくわけて二種類あります。一つは、専門書で仕事の指導書です。いま一つは、心の糧になるもの。つまり、一般教育書です。両方とも大事です。が、とくに後者について考えてみましょう

宗教、哲学、道徳、芸術などに関するものは、人間が生活者として、強く安定した、自ら生きる自発力をもって、日々を生きる栄養分です。人間として生れた限り、だれでも、こう生きねばなりません。そのための栄養が、一般教養書です。

それは、誰が、いつ、どこで、何度よんでも、新しい意味を発見させるものです。決して、よみすてにできません。昭和三十五年でしたか、戦後はじめての東大総長だった故南原繁先生が、京都の同志社大学で講演されました。そのとき、先生が「歴史にあらわれた本をよみなさい。たくさんよむ必要はない」と、いわれました。基督者として、先生にとっては、聖書が第一の書です。ルソーの「懺悔録」もよむべきものといわれています。わたしは、同先生からたいへん教えられました。まず「回想の南原繁」をよんでみて下さい

いま、わたしの座右には「久松真一著作集」があります。敗戦直後のまるで木からおちた猿以下のくらしの中で、わたしは、京都大学仏教学教授の久松博士にめぐりあいました。以来、三十年、もしこの先生との出会いがなかったらわたしは、猿以下の人間としてしか生きていなかったでしょう。一見、重々しい著作集です。が、中味は生きる最深の真理が、だれにでもわかるような言葉でかいてあります。むろん、むづかしいです

東洋の心、いいえ、仏教の哲理はいまや全人類の真理です。中に、「茶道の哲学」という一巻があります。茶道は単なる稽古ごとではない。日本独自の文化として世界にほこるべき日常生活の哲学です。それは、全人類の日常性の原理です。読書しましょう！

カット　溝上先生

「溝上文庫」の開設について

この度、溝上先生より左記の図書が寄贈されました。御好意に感謝し、これを「溝上文庫」と名づけ、図書館に開設、備え付けました。大切に利用しましょう。

高群逸枝全集（理論社）全十巻

一、母系制の研究　二、招婚婚の研究（一）　三、〃（二）　四、女性の歴史（一）　五、〃（二）　六、全詩集、日月の上に　七、小説、随筆、日記　六、日本婚姻史、恋愛論　九、火の国の女の日記　十、評論集、恋愛、

五木寛之作品集（文芸春秋）全二十四巻

①蒼ざめた馬を見よ　②霧のカレリア　③青年は荒野をめざす　④第三演出室　⑤ソフィアの秋　⑥涙の河をふり返れ　⑦内灘夫人　⑧風に吹かれて　⑨モンダウの重き流れに　⑩青春の門　⑪ヒットラーの遺産　⑫恋歌　⑬裸の町　⑭私刑の夏　⑮狼のブルース　⑯朱鷺の墓　⑰ユニコーンの旅　⑱にっぽん三銃士（一）　⑲にっぽん三銃士（二）　⑳白夜草紙　㉑変奏曲　㉒ゴキブリの歌　㉓地図のない旅　㉔魔女伝説

世界の大思想（河出書房）全二十四巻

(1)プラトン　(2)アリストテレス　(3)モンテーニュ（上）　(4)〃（下）　(5)デカルト　(6)〃　(7)カント（上）　(8)〃（下）　(9)ヘーゲル　(10)キルケゴール　(11)ホッブス　(12)スミス　(13)モンテスキュー　(14)ルソー　(15)マルクス　(16)〃　(17)〃　(18)〃　(19)レーニン　(20)ウェーバー　(21)ニーチェ　(22)ハイデッカー　(23)サルトル　(24)〃

久松真一著作集（理想社）全八巻 ― 現在受入整理中 ―

国吉康雄展について

秋の一日銀座の画廊巡りを思いつき、京橋まで足を伸してブリジストン美術館で開催中の国吉康雄展を見る。あまりの素晴らしさに感動して昼食の時間も忘れて鑑賞し、外に出たのが午后二時頃であった。

昭和二十九年国立近代美術館で国吉の遺作展を見たのが私の最初で、それから二十年は過ぎた。が、そのときの印象の強さは今でも忘れられない。色の美しく新群だったこと、素抽の力強かったこと、水彩画（ガッシュで抽く）でもこんな力作が抽けるものかと思った。

今度の展示は、アメリカの各美術館のコレクションの中から油絵の大作四十八点、カゼイン画六点、素描二十二点、その他板画、合計百六十点で、日本からは倉敷美術館の飛び上ろうとする頭のない馬、国吉の代表作展である。

異国の地で活躍し、二十世紀前半のアメリカを代表する画家であったが、日本ではあまり知られていない。国吉の生立について少し紹介すると、岡山市に明治二十二年に生れ、岡山市の県立工業学校染色科に入学したが、絵が好きであったことから十七才のとき退学してアメリカに単身渡り、苦学して画家になった。生前一回だけ父親の病気見舞に帰国し、終戦後は日本にも帰り作品発表を希望していたと思われるが、六十四才で没してしまった。

国吉の絵には、派手やかさよりも寂しさが画面にひそんでいる。彼のヒューマニズムの精神からくるものと思われる。戦中戦後十年間の作品が私は好きである。絵に緊張感が充実している。『拷問』等の戦争中の作から、『王様』、『魚の頭』等戦後の作には色も晴ればれと明るく色彩が鮮明で制作に自信が感じられ、アメリカ代表の作家らしい風格を示している。

印象派から洋画の第一歩を学んだ日本の作家とは異った表現が見られるが、その中にも東洋人のもつ繊細な墨色の美が感じられる。やはり日本人である国吉をみるのである。

銀座八丁目、吉井画廊では、中川一政展が開催されていた。八十才を過ぎた先生の百号の油絵『箱根駒ケ岳』の連作他、花の絵二十数点近作を拝見して健康な生々とした感動を覚えたのは、先生の健康な精神から生まれるものと思い生きる喜びを感じ、帰りの車中、今日一日の画廊めぐりに価値を見出し生き甲斐を感じた。

参考資料

- o 国吉康雄画集（東京新聞）
- o 中川一政随筆集「腹の虫」（日本経済新聞）

「ことば」に思う

黒岩光生

水や空気と同じように、私達に欠かすことのできないものに「ことば」がある。水や空気のありがたさがわからないように、自由に使うことのできる人々にとってはことばも例にもれず余り大切にされたり、そのありがたさは、わかっていない。もし、ある日、この世の中からことばが消えたら、ことばの重要性を感ずるものであろうが皮肉なことにそれは不可能のようである。現在の日本人の言語生活の、そのきわまりない乱れた姿を認識させるためにも、そんな日があればと思っているのであるが…

ある一日の言語行動をふりかえってみる。一日中、私は正しいことば使いができたであろうか。残念なことにそれはできなかった。まずその例を上げてみると、文法的にみて正しくない所が余りにも多いことである。文法的ばかりでなく、意味の上から考えても明らかにま違っている。ある会話において、自分自身にもよくわからない難しいことばに、へんてこな助動詞をつけてしゃべっているのである。人はとかく難しい表現をすれば立派だと思ったり、思われたりするので、私もそれをしてしまう時もある。まだある。外国語の乱用である。ことばの中に一つでも多くの外国語が入っていると、ちょっと学があるようでよい気持になる。しかし、その意味を考えてみるとまるきりでたらめで、実際学ある人が聞いたらたぶん「変な使い方だ」と思うに違いない。

その他にもたくさんある。あげていたらきりがない。このような

誤りを反省するたびに、徹底した言語教育の必要性を感ずる。

終戦後、東北地方を中心に方言の標準化がなされたとか学生時代に聞いたことがある。それによって、その結果正しいことば使いの標準語化がなされたかは疑問である。方言はとかく卑しいことばだとされがちであるが、この観念こそ誤りをおこす遠因となったのだと思っている。方言は古くからその地方に伝わっている由緒あることばで、情緒があり、標準語では表わすことのできない感情をずばり表現している。日本語が根本的に改革されない限り方言は使われるであろう。それが自然であり、また当然である。だから方言は生きたことばであり、愛すべきことばである。

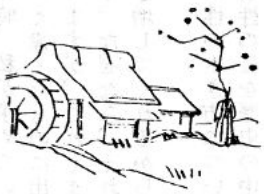
変な流行語で思いつく近頃である。時々それを耳にするが、その恐るべきことばに、日本人の国語に対する意識の低さを感ずる。私もたまには冗談の中に取り入れるが使ったあと、空しい気持になることもある。すなわち、日本語の本来の姿は消されつつある。

日本人は自らの手で日本語を低俗なものにさせ、後には国語でなくそうとしているのではないだろうか。一国の国語を守り抜くことのできない日本人の民俗性は何と嘆かわしいことか。ここでもう一度、国語を再認識し、真心をもって使い、理解しなければならないそれによって一日一日と汚されていく日本語を何とかしなければならないと思う。

日本語の本来の姿はもっと上品なものであったのではないか。上品といっても単なる上品ではなく実に響きと格調をもつ特徴あることばである。しかし先に述べたよう現在はそうではなくなって来ている。一日の言語生活をもっと広く考えてみると、国語の意識は薄れ、まるで他人の国のことばを借りて来て、それと乱用している感じさえする。

生まれた時から今日まで、私達を支えて来たものは一つしかないそれは「ことば」である。「ことば」をもっと大切にできないものであろうか。

「ことば」はいつも生きているのであるから……。



若い魂と書きことば

天田邦子

一般的に、「汝自身であれ！」の呼び声を日夜聞いている若い魂は、左顧右眄し、背後や周囲をくまなく気遣いながら眼をきょろつかせる動作の過程でもなお、己れという人間の核心、立場をみつけようと試みる。その際〝背後や周囲〟の圏内には、さまざまなレベルでの内実が密集しているのだけれども、ことば文化圏もまた、今日の我々の身近にあって、若い魂の性急な精神的飢餓を引き寄せる。ことば文化が人間の生活文化の一分岐にすぎないことを自覚しつつ、話す、聞く、書く、読む、感ずる、考える、外部とコミュニケートするなどの動作から成り立つ総体は、若い魂の試みにとって有力な材料となりうることは否定できないように思う。

ところで、私は元来、対談はまだしも座談会や討論会は苦手であった。ほんのちょっとしたことでも議論をしだすと、たちまち混乱してしまう経験も多い。自分たちの使っていることばが、どんなに曖昧かを痛感したり、問題が複雑なほど、論題の自分なりの結着の糸口が乱れ、解決への道程の遠さ煩雑さに疲れたりする。（もっとも困難点を明らかにできることに意義を認めるべきかもしれない）より正確には、私の口数が少ない資質や、各々の説を速やかに捉え自分の立場を対峙、関連させうる訓練を欠いているせいかもしれないが。そうした資質にふさわしく書きことばに触れ、感じ、考える作業が一定の役割をもってくる。

「汝自身を知れ！」ここで意味するのは、自己認識、人生主義的追求、判断の基準や規範の確立など多層であってよい）の構築工事として、書きことばを読むのは、事柄を知り、事柄と己れの立場の関係を問うことに他ならない。固有時の対話は、囚われ、憑かれ、拒絶などの展開をするし、時として自分のことば一切は死にゆき、おのれを責めつつ「初心」に戻ることもあるし、まれには形を成しつつある立場を補強したりもする。汝自身を問う限り、己れの立場とことばをみつけ出そうとする限りこの運動はたどたどしく続くだろうと今は予感する。

ただ最近、本を読むことについて、「若い魂」とは別途に、多くの

本を読み、事柄を知っていた方が望ましい場合と、多くを読むことが、かえって害になる場合と、切実には書きことばを必要としない場合の区別の要も感ずる。今の私には、第一の立場を、秩序づける力とともに課したい。それは、物を見ないで勝手に「物想い」にふける、物について想っていると自分で錯覚することを少なくしたいためである。何かをやらかそうとして、とんでもない事を、無関係な方向に向かって、ピントのはずれたやり方でやってしまったり、ウロウロしてしまうことを避けた願いである。しかし、改めて、物を見るとか知るとは何かを取り出そうなら、それは依然として問いの形で残る。

私の読書

二年　竹内和子

私にとって、読書の世界はとても魅力があります。それは、私にとって興味のある、そして、何かしら私なりに答えを求めている事柄について書いてある本を、読むことにしているので、そのせいなのかもしれません。この様にして本に接している時、私が求めているものとまったく違ったものに出会うことがありますが、これもまた、楽しみです。なぜなら、それは、私の興味を増してくれるからです。

たとえば、女性の生き方についてさまざまな女性の姿を歴史の中に求め、『めくるめく王朝の女』『近代女性群像』『ああ野麦峠』などを読むと、女性の生き方について、改めて考えてみなければならない問題が、たくさんでてくるのです。それは、今の私が人間や社会や自然について考えているうちの大切な問題のひとつだからかもしれません。そして、今述べたことに関連して、『アンネの日記』『大地』『若い日の生き方』『現代の青春』などを読んでみました。勿論、私がこれらの本を読んだのは、これらのためばかりではなく、著者に興味を持ったり、もう一度読み直してみたいと思ったことなども、原因となっています。最近読んだ『複合汚染』『未来への遺産』『戦争と平和』『私のソビエト紀行』なども含めて、これらの本は、戦争の醜さや、人間の美しい面などを私に語りかけ、過去の人々やその創造物を通して、私にさまざまのことを問いかけます。そして、私も私自身に、青春とは、人間とは、社会とは、と自問してみるのです。私は、この様にして、本からさまざまなことを学び、多くのことを教えられました。これからもまた私は、多くの本に接してゆきたいと思います。

「今ひとたびの」を読んで

二年　桜井拓子

『人の世の恋とはかくも美しいものであろうか。かりそめならぬ慕情を胸に秘め転変の波にさいなまれながらも、ただひたぶるに「そのひと」の面影を抱きつづけ、晴れて再会の街角に立った主人公の瞳に映じた恋人、暁子の姿は？あまりにもパセティックなその終局は、またあまりにも無惨、酷薄すぎる』という解説に魅かれて、この本を読み始めた。

新刊書籍・雑誌・教科書・地図

株式会社　西沢書店

上田市中央３－１－１２　電話２２－００２４（代）

恋愛の完結は肉体の結びつきであると言う。恋愛の完結をみることなく一人の女性を生涯愛した主人公に、私はプラトニックラブへの理想と又苦しさを見つけた。

一度読み終えた時、昭和二十一年代の恋愛の姿だろうが、それにしてもたとえ時代がどの様であろうとも、人間はこの様に人を愛せるものだろうか、人の一生を一人の女性を慕うことにのみ人生を費やすことができるだろうか……と理解できなかった。

もう一度数ヵ月経てからこの本を手にした。確かに、現代は男女の情事を主題としている本が氾濫している。小説ばかりではなく、恋愛の姿も小説の様に思われているような気がする。確かにそうだろうか。二度目に読み終えた時には、時代の差は感じられなく、ただ愛するということの人間の心の奥に潜むものはいつの世も同じではないだろうか……。マスコミが一部分を大きく取り上げそれが全てであると思われている現代の中に、主人公と同じような心の葛藤に日々ひたすらに生きている人が存在するに違いない。「愛するということは意志である。それ以外の何ものでもない」と友人が言った。この本の中に、意志によって生涯愛し続けた姿をはっきりと証された気がした。

『あらざらん比の世の外の思ひ出に　今ひとたびの逢ふこともがな』という和泉式部の歌があるが私はたまに自分が死ぬときの場面を空想することがある。そんな時私は、自分がこの世に対して何を一番残しているだろうかと思う。主人公はヒロイン暁子にもう一度会いたかった。彼の心中は和泉式部の心中にぴったりと重なってくる。人生には、仕事への道、人格への完成、趣味への到達、それぞれがある。しかし、もし人間が人間を愛せなくなり、又愛されなくなった時、人間としての存在意義を失ってしまう気がする。一瞬なんと不幸な主人公だろうと思い、またこの上なく幸福な主人公であるとも思われてくる。深秋にもう一度虚心になって読んでみようと思う。

読書について

一年　岡沢良子

私たちはどうして本を読むのでしょう。心に余裕のある時、あるいは心が空虚な無重力状態にある時又は習慣によってでしょうか。

私は小学校の頃は本とは全く縁がなく、図書館から借りてきてもただ飾っておくか読んでも最初と最後の二、三頁でした。

こんな本嫌いの私が全く突如として本を読み始めるようになったのは、高校へ入学して間もない頃でした。親元から離れて、自由な自分だけの時間を持てるようになったそんな時、ふと目にとまったのが母の持っていた夏目漱石の『こころ』でした。母は以前から本を読むことを勧めてくれていましたが、その頃までの私には全く馬耳東風といったところでした。

『こころ』は、二日位で読んだと思います。今でも思い出深い本のひとつです。読後、はっきりした感想は多分言えなかったでしょうが、私は確かに本に何か素晴しいものを発見したような気がしました。

それからは、毎日のように図書館に足をのばして現代小説中心に漁り読みが始まり、なかでも印象深かったのが、原爆の傷あとを抽いた井伏鱒二の『黒い雨』で、その他、横溝正史の推理小説、北杜夫のドクトル・マンボウシリーズ遠藤周作のぐうたらシリーズ等、比較的入りやすい本を自分の興味の趣くままに読んでいたように思われます。

高校の三年間は、相変らず現代小説中心型の読書でした。それでも次第にエッセイに興味を持ちはじめ、星新一、岡潔、湯川秀樹などのものを読むようになりました。特に、湯川氏のエッセイからは、深い感銘を受けたことを覚えています。そして、去年の後半から手当り次第の濫読が始まり、多い時は一日二冊、少なくても一日一冊の割で読むようになり、活字に眼を通さないと気がすまないような読書癖がついてしまい、他の事が全く念頭になくなってしまった時期がありました。長編が多く、五味川純平の『戦争と人間』、吉川英治の『親鸞』等、ほとんどあらゆる分野に亘った読書でした。

こうした私の読書経験をふり返ってみて考えさせられるのは、よく今までも言われてきたように濫読がよいかそれとも少数精読がよいのか、ということです。

特に情報化時代と言われる今日では、次から次と新刊書が出版され多すぎる本が巷に溢れていて、どの本を読んでよいのか選択に迷うまま次から次へと濫読しがちになります。しかし、私には、精神の新陳代謝を活発にするために、

新しい本を求めての濫読は有益だと思われますし、濫読は博読に辿りつく一つの過程でもあると思われます。更にまた、濫読を通しておのずと良書と悪書を見分ける、選定眼が培われていくように思います。そして、それによって良書を精読するという姿勢が出来てくるのではないでしょうか。

若い時代は、好奇心と興味とをもって、あらゆる分野の本を濫読する時期であるように思います。たとえ、難解な本であっても、そのときこそ好奇心を最大限に働かせぶつかっていくなら、おのずと「叩けよ。さらば開かれん」という結果になるのではないでしょうか。いくら難解にみえても、その本の扉を一度は叩いてみたいものです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

―児童文学特集―

大切なもの「絵本」

子どもを語る会　上野佼英

元来、読書とは、楽しみのためにあるべきもので、苦しみや難解さがつきまとうものではない。ところが、幼少年期に読む、聴くの訓練がきちんと出来ていなければ至難の事となる。

訓練などというと大げさに聞こえるが決して人並はずれた特別の事ではなく、極く当り前に母親とか、保母さんとかが、読みきかせを毎日欠かさず続けるというそれだけで充分なのだ。

この一つを基本として、更に、遊びで体を充分動かして充実した子供時代を過させなければ、読書力は育たない。読書力とは、想像力、理解力、創造力等を総合した言葉だと信ずる。この読書力が、まともに身につくために、幼年期の絵本が必要であり、少年期の童話が大切なのだ。そして、そこから「人類愛」（思いやりがあって、愛情が豊かで、決断力）に富んだ人間らしい人間が育っていくのだ。

絵本の例として

「ぐりとぐら」の世界では料理をしたり、食べたり。「どろんこハリー」では、思い切りドロンコになったり。「いたづらきかんしゃちゅうちゅう」では冒険を果し、「スーホの白い馬」では広いモンゴル大草原を広々と感じ、更にスーホの哀感に共感したり。きかんしゃやえもん」のおかしさ、ふしぎさを味わったり、「おかあさんだいすき」の、又「くまだっこ」の素晴しいプレゼント。「ひとまねこざる」一連シリーズのどたばたと、思う存分いたずらを満喫したり、全く実際には出来ない喜怒哀楽のさまざまな場面に仮体験として直面しながら豊かな感情、冷静な判断力勇気ある決断力等を養い、更に美しいさし絵の世界からは美に対する感覚をも育てられるのだ。

こう書いてくると何だか、こどものためだけでなく、大人のためにも絵本は素晴らしく思えてくるが、実際その通りで、絵本の愛読者は、こどもばかりでなく、大人（特に保育者）も非常に多く、研究も盛んである。

このような幼児期の絵本の楽しみが実は、読書力に直結しているのであって、まさに絵本は読書の入口である所以なのだ。

最後にもう一度くり返すが、毎晩読み聞かせができるか、できないかが、重要なキメ手になるので世の若い母親たち、と、これから保育者になる短大の学生さんたちにくれぐれもすすめたい。

（上田市・英文堂店主）

こどもの本の専門店
上田こどものとも社
英文堂書店
上田市海野町〒386 ☎ 0268(22)3934

紙類・文具・事務用品の
ご用命は
志摩文具店
上田市中央一丁目四ノ五
☎22－1495

私と読書

一年　井原初枝

何故かしら童話を読むことには抵抗を感じ、本を手に持つことさえしなかった。「童話なんて子供達が読む本なんだ。」そんなふうに思い込んでいたからです。そんな私が、童話を手にするようになったのは、児童文学の講義を受け「童話」という言葉を幾度となく耳にするうちに、童話に興味を持つようになった。そして、幼児教育を目ざしている私にとって童話は、欠かすことのできない必要な物となると考えるようになった。

童話なんか、と思っていたのにいつの間にか童話に引き付けられて無心に読んでいる自分、図書館に行くと、すっと童話の前に立つて本を手にしている。そんな自分を見つけた。童話のおもしろさを知った様な気がした。そして、童話は子供達のもの、いえ、子供を対象として書かれている本だけど決して私達大人が読んでもおかしくない。年令を選ばず、誰もが気軽に手にして読める本ではないかと思う。

童話は、私にとって一つの世界「愛の世界」を与え、夢の世界へと誘い込んでいった。もちろん、現実にありえない、夢の世界でしかありえないことは十分に判りきっているのに、童話を読んでいる時には、不思議と抵抗なしに自然にその世界に誘われ、童心に返り一時を過すことができる。私にとって、この一時の世界は安らぎを与えてくれる。いいえ、何か深い意味を持った大切な時間のような気がする。

忘れかけていた童話の世界、一時の夢でしかない世界だけど、何かを求めて童話の世界への旅を続けていこうと思う。

私は、一時の童話を読む時間を大切にしていきたいと思う。

「いのち」

卒業生　鳴沢美智枝

―第一幕―

実ならざる一本の柿の木、その根本に、ヨタヨタと頭をもたせかけるススキの群、遠くには煤色した稲穂がくたびれたように広がりみえる野原。

こんな背景とは裏腹に、子供達は元気いっぱいにわらべ歌遊びに戯れている。やがて、真赤な夕焼けがすべてを染める。

「わあ！きょうもきれいな夕焼け」

「ほんとうだ、うたおうや」

「ゆうやけ、こやけで、ひがくれて」

子供達、身振りをつけて歌いだすと、百姓達（子供達の親、姉）が登場。

「かわいい子供達、ここで遊んでおったのか」

「子供達は楽しそうに歌っているが、この夕焼け、明日も天気！」

「日照り続きのこの不作、稲の穂が一粒もならねえ…」　庄屋登場

「皆の衆、聞いてくれ、ため池造りの許しが出た」

「それはありがたい」

「みんな力を合わせてがんばるのだ」……

―第二幕―

百姓、子供達、一生懸命にため池を造っているが、やがて疲れきってのびてしまう。そこへ侍が登場

「百姓ども、働いておるか」

「さぼっているやつは、首をちょん切るぞ」

「もっと働け」

「毎日、毎日、働きずくめ」

「何回やっても、土手が崩れてしまう」

「それは、何かのたたり、娘を一人うめるのだ」

「そんなむごいことできねえ」

「侍に逆うやつは、首をちょん切るぞ」……

三人の娘達、侍の前に出される。三本のススキの穂が折られる。一本に朱の印がつけられ、くじびきとなる。それを引いた娘、まさのは、悲しみのあまり、その場を離れ、隅にただずむ。やがて、静かに立ち上り、

「わたし、一人の命が村人みんなを救うならば、喜んで、この命捧げましょう。……。」

と唇にススキの穂をくわえ、舌をかみきる。

「おねえ!!死んじゃいやだ。」

とりすがる弟、両親、呆然としながら

「まさの、ゆるせ、お前の命、決してむだにはしない。」

「お前の命で、村人皆を守ってくれ」村人全員立ち上る。

「まさの、お前の命むだにはしない」

「今度は、立派なため池ができるだろ。」

「立派な穂ができるだろ」

「お前の命、むだにはしない。〈」

―幕―

これは『上田盆地の民話』の舌喰い池』を脚本化した抄である。脚本などといえば、かっこいいがそんな大それたものではない。発表会の為にクラスの子供達の個性を考え、劇風にしたものである。これを演じることにより、まがりなりにも、人間の歴史、命の尊さがわかればと考える。しかし、これらの心を、年中児が、市民会館の大舞台でどれだけに表現し、演じられるかが問題である。テープにふきこんだ声と体が一致するだろうか。バック・ミュージックはどうしょう。二十日足らずの練習期間、こちらの心境を知るや、知らずや、すぐ別の遊びに発展し騒ぎ飛びまわる兵ぞろい。

それにしても、幼稚園教諭たる者、何と、諸々の才が要求されるものか。未熟な私には、浅間から吹きおろす風は、冷い攻撃の失となって心臓をつき刺す。

（小諸市・みすず幼稚園）

新着図書案内

日本の女性史（全７巻）		（集英社）
母親のための教育学	小原国芳	（玉川大出版部）
日本史女性１００選		（秋田書店）
幼稚園では遅すぎる		（ごま書房）
わんぱく教育		（徳間書店）
ちがうぼくととりかえて		（童心社）
本が語ってくれること	吉田健一	（新潮社）
螢草抄	宇都宮貞子	（創文社）
考える愉しさ	梅原猛	（新潮社）
日本民衆の歴史　1.		（三省堂）
おんなの戦後史	もろさわようこ	（未来社）
心の実験室		（福村出版）
信州の彫刻		（信毎）
幕末のおんな		（新人物往来社）
歴史を彩る女たち	大原富枝	（東邦出版）
教育と人間	矢内原忠雄	（東大出版）
政治と人間	〃	（〃）
戦後思想と歴史の体験	日高六郎	（勁草書房）
近代人の疎外	バッペンハイム	（岩波書店）
人間の限界	霍山徳爾	（岩波書店）
権威と権力	なだいなだ	（〃）
化学物質と人間	磯野直秀	（中央公論）
リズムと音楽と教育		（全音楽譜）
ことばのための音楽と動き		（〃）
天皇家の歴史上、下、	ねずまさし	（三一書房）
日本女性史　（全７巻）		（評論社）
ドン松五郎の生活上、下、	井上ひさし	（新潮社）
黒沢明の世界	佐藤忠男	（三一書房）
歌いかたの基礎		（音楽之友社）
それゆけ！オーケストラ	石丸寛	（〃）
人間とは教育とは、	E．フロム	（黎明書房）
欧米と日本の特殊教育		（慶応通信）
高校風土記　!!		（銀河書房）
教育行政と教育法の理論		（東大出版会）
創造する子供	モンテッソーリ	（エンデレ書店）
音楽の歴史と思想		（音楽之友社）
ウイーンはなやかな日々		（〃）
ぼくのB、B、B		（音楽之友社）
こどものための音楽と動き		（全音楽譜）
精神薄弱の医学		（慶応通信）
社会保障権と福祉行政		（ミネルヴァ書房）
中国現代教育史		（田畑書店）
コダーイ．ゾルターン生涯と作品		（全音楽譜）
有賀喜左衛門著作集　全11巻		（未来社）
マカレンコ全集　〃８〃		（未来社）
斉藤喜博全集　〃18〃		（国土社）
嗚咽する海　ＰＣＢ人体実験		（亜紀書房）
古代国家と女性		（評論社）
桃山時代の女性		（吉川弘文館）
ぼくの英才教育	神津善行	（
現代のしつけと親子関係	姫岡勤	（川島書店）
未開人の性生活	マリノウスキー	（新泉社）
未開社会における犯罪と慣習	〃	（〃）
野にあそぶ	斉藤たま	（平凡社）
閉された言語、日本語の世界	鈴木孝夫	（金羊社）
幼児の文字指導	藤田恭平	（三省堂）
幼児教育		（有斐閣）
地域子ども会入門		（新評論）
乳幼児の心理学		（同文書院）
保育学概論	山根薫	（〃）
日本語をさかのぼる	大野晋	（岩波書店）
野の玩具ー草笛、竹トンボの世界ー		（中央公論）
自然観察入門ー草、木、虫、魚とのつきあいー		（〃）
育児学	平井信義	（光生館）
ウイーン．フィルえぴそーど		（立風書房）
自閉症児	ウイング	（川島書店）
３才未満児の保育とあそび		（ミネルヴァ書房）
日本青年の意識構造	松原次郎	（弘文堂）
フレーベル人の教育	フレーベル	（玉川大出版）
新生児	三宅廉	（日本放送出版協会）
モンテッソーリの教育　６才〜１２才		（あすなろ書房）
複合汚染上、下	有吉佐和子	（新潮社）
ローラ叫んでごらん		（サイマル出版）
音楽の基礎指導	木村信之	（音楽之友社）
創造性と音楽教育	〃	（〃）
全国保母試験問題とその解き方		（全社協）
中級試験問題集		（法学書院）
幼児の臨床心理事典		（あすなろ書房）

〔寄贈図書〕　（本年分）

伊那歌道史	県教育委員会寄贈	
伊那尊王思想史	〃	
藤村書誌	〃	
ソクラテス最期の弁明	本学	浦沢先生〃
現代の青春（高橋和己．エッセイ集）	〃	〃
フランス語入門	〃	〃
世界の若者たち	〃	〃
ゴリラーとピグミーの森	〃	〃
模索する資本主義	〃	〃
日本社会政策史上、下	〃	天田先生〃
岩波講座　哲学　全18巻（整理中）	〃	遠藤事務長〃
スパイスロード、ー香辛料の冒険者たちー	S.B 食品KK．寄贈	
香辛料 Ⅱ	〃	
高原の夢窓　著者　長野大学	富田光行先生	〃
白隠禅師	植村甲子郎氏	〃
上田の文化財	上田市教育委員会	〃
千曲川の魚	上田市立博物館	〃
上田紬	〃	〃
長野県教育史　別巻	県教育委員会	〃
人間を考える　著者	松下幸之助氏	〃
透明の壁	上田市長石井泉氏	〃

㈱　溝上先生寄贈図書は１ページに掲載済

編集後記

この春、図書館は溝上先生からの寄贈図書を受け、少ない当図書館の蔵書にうるおいを与えられました。今回の図書館だより二号はこの報告と児童文学に対する考え方の特集をし、学外者からの原稿もつのりました。特に溝上先生からは一文もお寄せ頂きました。後者については、もっと深い堀り下げが必要かと思いますが、次号への課題として皆さんの一層の協力を願い、新たな企画等の意見も出していただきたいと思います。

（長張）